

第1問 基礎編① (解答)

解答 (配点 各4点 合計8点)

① (借方)	その他有価証券	2,501,000	(貸方)	当座預金	2,501,000
② (借方)	その他有価証券	449,000	(貸方)	繰延税金負債	134,700
				その他有価証券評価差額金	314,300

計算過程、解説

- ① 株式を購入した際に発生した付随費用は、株式に含めて計上します。
- ② その他有価証券の時価評価の際は、評価差額を当期の損益とせず、税効果額を控除した金額を純資産の部に直接計上します。

その理由は、その他有価証券は中長期的には売却が想定される有価証券であるため、貸借対照表に時価を載せることが投資家への有用な情報提供に繋がる一方で、直ちに売却することにつき制約があることも多いその他有価証券の評価差額を当期の損益として認識することは適切でないと考えられているためです。

第2問 基礎編② (解答)

解答 (配点 各3点 合計9点)

① (借方)	前払金	106,000	(貸方)	当座預金	106,000
② (借方)	仕入	373,500	(貸方)	前払金	106,000
				買掛金	267,500
③ (借方)	買掛金	2,500	(貸方)	為替差損益	2,500

解説

前払を含む外貨建て仕入取引の問題です。

- ① 前払金支払時は、支払時の為替相場により円換算します。
- ② 仕入取引時は、前払金の充当部分については前払金支払時の為替相場による円換算額をそのまま付し、残りの部分については取引発生時の為替相場により換算します。
- ③ 買掛金は貨幣項目であるため、決算時の為替相場による換算替えを行います。

☆ 貨幣項目と非貨幣項目

貨幣項目とは、将来円でのお金の回収や支払があるもの、もしくは円への転換が行われる項目です。

第3問 基礎編③ (解答)

解答 (配点 3点)

(借方)	建物	30,150,000	(貸方)	建設仮勘定	20,000,000
				当座預金	4,150,000
				未払金	6,000,000

解説

固定資産の取得時に生じた付随費用は、固定資産の取得原価に含めます。
 また、問題文の読み取りについてですが、登記料は工事代金とは別途発生するものですから、登記料の150,000円は工事代金の残金10,000,000円には含まれないことを適切に読み取る必要があります。

第4問 基礎編④ (解答)

解答 (配点 各3点 合計12点)

①	(借方)	損益	1,350,000	(貸方)	本店	1,350,000
②	(借方)	支店	1,350,000	(貸方)	総合損益	1,350,000
③	(借方)	損益	3,500,000	(貸方)	総合損益	3,500,000
④	(借方)	総合損益	4,850,000	(貸方)	繰越利益剰余金	4,850,000

解説

- ① 支店の会計帳簿では、支店の当期純利益を損益勘定から本店勘定に振り替えます。本店勘定に振り替えるのは、支店における資本勘定が本店勘定であるためです。
 あるいは、支店で稼ぎ出した利益を、会社全体の利益を計算するため本店に渡す、といったイメージを持っていただいても結構です。
- ② 本店の会計帳簿では、支店の当期純利益を支店勘定で受け入れ、会社全体の利益を計算するための勘定である総合損益勘定に振り替えます。
- ③ 本店の当期純利益は、本店の損益勘定で算定されます。これを、会社全体の利益を計算するため、総合損益勘定に振り替えます。
- ④ ②、③の仕訳の結果、総合損益勘定の貸方に支店の利益、1,350,000円と本店の利益3,500,000円の合計、4,850,000円が転記され、これが会社全体の利益になります。この総合損益勘定の残高を繰越利益剰余金勘定へ振り替えます。

総合損益					
繰越利益剰余金	4,850,000	支	店	1,350,000	
		損	益	3,500,000	
	4,850,000			4,850,000	

第5問 基礎編⑤（解答）

解答 （配点 各3点 合計9点）

①	（借方）	売上高	100,000	（貸方）	売上原価	100,000
②	（借方）	利益剰余金（当期首残高）	1,000	（貸方）	売上原価	1,000
③	（借方）	売上原価	1,200	（貸方）	商品	1,200

※ ②の仕訳の借方科目は、「利益剰余金」だけでも構いません。

解説

連結会計のうち、親子会社間の商品売買があった場合（ダウン・ストリーム）に必要な会計処理を確認するための問題です。

①は、内部取引相殺の仕訳です。連結財務諸表は、企業集団全体の財政状態や経営成績を明らかにするためのものであるため、親子会社間の内部取引として計上されているもの（本問の場合は売上高と売上原価）は相殺し、取り消さなければなりません。

②は、期首未実現利益の消去と当期実現の連結修正仕訳をまとめたものです。ここが一番難しいところですので、順を追って考えていきます。まずは、当期の期首商品＝前期の期末商品であるので、前期末の処理から考えていきます。

(1) 前期末の処理（期末商品に含まれる未実現利益の消去）

- ・ 前期末においてP社が乗せた利益（10,000千円×10%＝1,000千円）だけS社の期末商品の金額が多くなっている→商品を1,000千円減らすため貸方に計上する。
- ・ S社の個別P/Lの作成上、売上原価の計算は期首商品＋当期仕入－期末商品という式で行うため、期末商品の未実現利益分の1,000千円分だけ、連結P/Lに計上すべき売上原価よりも過少に計算されている。→売上原価を1,000千円増加させる。

☆ 前期末の連結修正仕訳

（借方） 売上原価 1,000 （貸方） 商品 1,000

(2) 当期首の処理（期首未実現利益の消去と当期実現の仕訳）

(a) 期首未実現利益の消去（開始仕訳）

前期末に行った仕訳の再実施を行います。ただし、収益・費用項目は利益剰余金（当期首残高）に置き換えます。

（借方）利益剰余金（首）1,000 （貸方） 商品 1,000

(b) 当期の実現（実現仕訳）

当期首においては、この商品が外部に販売されていないため、P社が乗せた利益が未実現ですが、もし当期に販売されたのであれば、P社が乗せた利益も実現します。実現仕訳は、消去の仕訳を貸借逆により行います。

（借方） 商品 1,000 （貸方） 売上原価 1,000

(c) (a)と(b)の仕訳をまとめる（合算する）。

（借方）利益剰余金（首）1,000 （貸方） 売上原価 1,000

第6問 応用編①（解答）

解答 （配点 ①、②…各3点、③…減価償却費、累計額、それぞれ4点 合計14点）

①	（借方）	建物減価償却累計額	405,000	（貸方）	建物	600,000
		減価償却費	6,750			
		仮受金	50,000			
		固定資産売却損	138,250			
②	（借方）	減価償却費	10,000	（貸方）	建物減価償却累計額	10,000
③		減価償却費勘定 …	16,750（千円）			
		減価償却費累計額勘定 …	60,000（千円）			

計算過程

①の仕訳

- ・ 減価償却費（月割） $600,000 \text{ 千円} \times 0.9 \div 40 \text{ 年} \times 6 \text{ ヶ月} / 12 \text{ ヶ月} = 6,750 \text{ 千円}$
- ・ 売却時の帳簿価額
取得原価 600,000 千円 - 期首累計額 405,000 千円 - 月割償却費 6,750 千円
= 188,250 千円
- ・ 売却損益
売却価格 50,000 千円 - 帳簿価額 188,250 千円 = $\Delta 138,250 \text{ 千円}$ （売却損）

②の仕訳 … 売却した建物を除く、400,000 千円分

- ・ 減価償却費（年間分） $400,000 \text{ 千円} \div 40 \text{ 年} = 10,000 \text{ 千円}$

③の金額

決算整理前残高に、①、②の仕訳を加味すれば決算整理後残高が求まります。

	減価償却費		建物減価償却累計額	
①	6,750	後T/B 16,750	① 405,000	前T/B 455,000
②	10,000		後T/B 60,000	② 10,000

（注）「T/B」とは試算表（Trial Balance）の略であり、通常、「前T/B」は決算整理前残高試算表、「後T/B」は決算整理後残高試算表のことを表します。

（注）この勘定は、解答で求められている後T/B残高を求めるための過程を表したものであり、帳簿の締切の際の勘定への記入内容とは異なりますのでご注意ください。

解説

固定資産の期中売却、および期末における減価償却手続きの処理を確認する問題です。期中売却した固定資産については、売却した年度において期首から売却時までの減価償却費を月割りで計上し、売却時の帳簿価額を算定します。その帳簿価額と売却価格との差額を固定資産売却損益として処理します。なお、月の途中で売却した場合には、1日でも使用している月は月数に含める点を確認してください。

第7問 応用編②（解答）

解答 （配点 各3点 合計15点）

①	税抜				
②	(借方)	未払消費税	356,800	(貸方)	仮払金 356,800
③	(借方)	現金	150,000	(貸方)	売上 500,000
		クレジット売掛金	380,000		仮受消費税 50,000
		支払手数料	20,000		
④	(借方)	仮受消費税	2,949,100	(貸方)	仮払消費税 2,433,700
					未払消費税 515,400
⑤	租税公課				

解説

本問は、消費税に関係する取引の、期中仕訳から決算整理仕訳までを問う問題です。

- ① 消費税の仕訳方法（記帳方法）には3級で勉強する税抜方式と、2級で勉強する税込方式があります。本問は、決算整理前残高試算表に掲載されている勘定科目から、税抜方式によっていることを読み取る必要があります。
- ② 前期に確定した税額を納付する際は、未払消費税を取り崩して支払いますが、当社は仮払金にて処理していましたので、それを修正する必要があります。納付の際、当座預金口座から支払っていたとすると、修正仕訳の求め方は次のようになります。

正	(借方)	未払消費税	356,800	(貸方)	当座預金 356,800
誤	(借方)	仮払金	356,800	(貸方)	当座預金 356,800
修正	(借方)	未払消費税	356,800	(貸方)	仮払金 356,800

- ③ 一部クレジット払いで商品を販売した場合の仕訳を確認しました。通常、商品の販売には消費税が課税されますが、クレジット手数料には課税されません。その点を、仕訳に反映させる必要があります。
- ④ 決算時には、仮払消費税と仮受消費税を相殺し、未払消費税（翌期に納付すべき税額）を算出します。この際、③の仕訳で生じた仮受消費税を決算整理前残高試算表の金額に足すのを忘れないようにしましょう。
 - ・ 仮払消費税 2,433,700円
 - ・ 仮受消費税 2,899,100円 + 50,000円 = 2,949,100円
 - ・ 未払消費税 2,949,100円 - 2,433,700円 = 515,400円
- ⑤ 税込方式によった場合には、翌期に納付すべき税額を租税公課勘定に計上します。

第8問 応用編③ (解答)

解答 (配点 各3点 合計9点)

①	(借方)	貸倒引当金	185,000	(貸方)	貸倒損失	185,000
②	(借方)	当座預金	1,000,000	(貸方)	売掛金	1,000,000
③	(借方)	貸倒引当金繰入	210,000	(貸方)	貸倒引当金	210,000

解説

- ① 前期以前に発生した売掛金が貸倒れた場合において、貸倒引当金の残高があるときは、まずは貸倒引当金を充当し、それを上回る部分について貸倒損失として処理をします。問題文に記載されている、期中に行った仕訳は誤りですので、下記の手順により修正仕訳を求めます。

正	(借方)	貸倒引当金	185,000	(貸方)	売掛金	300,000
		貸倒損失	115,000			
誤	(借方)	貸倒損失	300,000	(貸方)	売掛金	300,000
修正	(借方)	貸倒引当金	185,000	(貸方)	貸倒損失	185,000

第7問も同様ですが、すでに行っている処理の修正が問われたときは、まず本来の正しい仕訳と既に行っている、誤りのある仕訳を並べて、両者の違いを修正する手順で行います。やはり頭の中で考えようとすると間違いの元になりますので、簡単でいいので下書き用紙に仕訳を書き、丁寧に解きましょう。

- ② 銀行勘定調整表のところで学ぶ内容は、銀行勘定調整表そのものの作成の問題としてだけでなく、第1問の仕訳の問題や、第3問の総合問題の一部としても問われます。当座預金勘定の残高と銀行の残高証明書の残高との不一致の原因ごとに、必要となる会計処理を押さえましょう。

- ③ ①の修正により、貸倒引当金勘定の残高はゼロになります。

したがって、期末売上債権残高に貸倒引当金の設定率を掛けた金額がそのまま貸倒引当金繰入の金額となります。

☆ 貸倒引当金繰入の計算

$$(6,600,000 \text{ 円} + 8,400,000 \text{ 円} - 1,000,000 \text{ 円}) \times 1.5\% = 210,000 \text{ 円}$$

第9問 応用編④ (解答)

解答 (配点 問1…各3点 問2…両方正解で4点 合計13点)

問1

- ① 60,500 (千円)
- ② 29,800 (千円)
- ③ 商品売買益 (※ 商品販売益でも正解です。)

問2

- 3分法により記帳した場合 42,200 (千円)
- 分記法により記帳した場合 42,200 (千円)

計算過程、解説

問1

- ① 仕訳の借方科目の合計により、容易に求められます。

現金 22,500 (千円) + 受取手形 38,000 (千円) = 60,500 (千円)

- ② 解答する「繰・仕」の仕訳は、期末商品棚卸高を売上原価から除くための仕訳です。したがって、[資料]より商品勘定をつくって期末商品有高を求め、その金額を解答します。

		商品	
期首商品		当期販売 (売上原価)	
	38,300	7/19	61,000
当期仕入		2/10	42,300
4/15	40,000		
9/25	55,000	期末商品 (差額)	
10/2	△ 200		29,800

- ・ 期首商品 … 3分法、「仕・繰」の金額です。
- ・ 10/2の取引
仕訳から、仕入商品の返品、割戻のいずれかがあったと判断できます。
- ・ 当期販売商品の原価
分記法の仕訳から、販売した商品の売上原価相当額がわかります。

解説

3分法、分記法は記帳方法の違いですので、どちらによっても売上総利益は同じになる、という点がポイントです。なお、仕入、繰商、繰商、仕入の仕訳に不安のある方は、計算大会3級の解説に詳しい説明を載せていますので、宜しければご一読ください。

第10問 応用編⑤（解答）

解答 （配点 各4点 合計8点）

- ① 90千円
- ② 121,300千円

解説

与えられた資料から取引を推定し、勘定分析を行って、解答すべき金額を求めます。

☆ [資料] 1

「？」となっている当期末貸倒引当金は、当期末売掛金残高が5,500千円、貸倒引当金を毎期末売掛金残高に対して2%設定しているというところから、 $5,500 \text{千円} \times 2\% = 110 \text{千円}$ と求められます。

☆ [資料] 2

期中仕訳は次の通りです。（問題文では「現金、または預金」という言い方をしていますが、本問の解答にあたっては現金回収か、預金回収かは関係ありませんので、「現金預金」とまとめても、使い慣れている「現金」、「当座預金」などの勘定で仕訳をしても問題ありません。ここでは、「現金預金」を使用します。）

(1)	(借方)	現金預金	8,200	(貸方)	売上	8,200
(2)	(借方)	売上	500	(貸方)	売掛金	500
(3)	(借方)	現金預金	12,000	(貸方)	前受金	12,000
(4)	(借方)	現金預金	102,500	(貸方)	売掛金	102,500
(5)	(借方)	貸倒引当金	100	(貸方)	売掛金	100

以上、[資料] 1の期首、期末残高の資料と[資料] 2の仕訳を基に各勘定を下書き用紙に書き、差額で解答に必要な金額を求めていきます。

次ページに下書きの一案を掲載します。下書きなので、きれいではなくても、ご自身が解りやすいようにまとめられれば十分です。なお、ここでも現金、預金勘定は必要ありませんので掲載を省略します。

売掛金				売上			
期首	6,000	(2)	500	(2)	500	(1)	8,200
差額 (掛売上)		(4)	102,500	差額	121,300	掛売上	102,600 ←
	102,600	(5)	100			前受	11,000 ←
		期末	5,500				
貸倒引当金				前受金			
(5)	100	期首	120	差額 (売上充当)		期首	1,000
		差額 (繰入)			11,000	(3)	12,000
期末	110		90	期末	2,000		

☆ 勘定分析により明らかになる仕訳

(借方)	売掛金	102,600	(貸方)	売上	102,600
(借方)	前受金	11,000	(貸方)	売上	11,000
(借方)	貸倒引当金繰入	90	(貸方)	貸倒引当金	90

最後に、売上勘定の差額で1年間の純売上高 (121,300 千円) を求めます。

ご挨拶

ご解答いただいた皆さま、お疲れさまでした。

今回の問題は如何だったでしょうか。今回は商業簿記 15 問、工業簿記 5 問という構成で、画面上で出題し、それを解いていただくというやり方で行いましたが、前回の反省から問題数、実施方法を変更しました。問題数は多すぎると消化不良になり、また工業簿記の問題はどうしてもある程度時間をかけて勘定連絡図、生産データや様々な計算表を作り解答するという問題が多いので、今回は範囲を商業簿記に絞り、実施することにしました。

前回、GWに実施した第 1 回の問題は、イベント用の問題ということもあり、実際の試験の出題は想定されない問題や、クイズ形式のような問題も入れました。したがって、繰り返し解くような問題ではありません、ということはこの最後のコメントに入れたのですが、それでも嬉しいことに 6 月に入ってから「計算大会の問題を解いた」という勉強ツイートをして下さる方がいました。そのようなこともあり、同じ時間を使って解いていただくのなら、実際の試験でも役に立つ問題にしたい、という趣旨で作ったのが今回の問題です。本試験とは異なる形式の問題もありますが、『本質的な理解を問う』問題を作成したつもりです。どのような問題でも、確かな理解に基づいて解答できる力をつけていただきたい、というのが作問者の願いです。しかし、今回の問題の点数が伸びなかった方も全く焦ることはありませんので、まずはテキストや基本的な問題に戻り、重要論点の基礎を盤石にしてください。

以下、第 1 回目と同じ内容ですが、皆さまにお伝えしたいメッセージです。

簿記の教室メイプルでは、簿記の勉強ではとにかく理解が大事ということを皆様にお伝えしています。テキストの内容を覚えようというのは、一見すると手っ取り早いように感じるかもしれませんが、しかし、無理やり覚えたものというのは忘れやすく、思い出すのにも大変時間がかかります。そして、覚えたのと同じような問題なら解くことができますが、少しひねられると全く対応できなくなってしまいます。

一方、理解を重視した勉強というのは時には時間がかかり遠回りのように思えても、一度理解できたものは忘れにくく、たとえ忘れてしまったとしても、思い出すことは非常に容易です。また、しっかり理解ができていれば、難しい応用問題にも対応することができるようになり、勉強するのが楽しくなります。何より、理解に基づいた知識というものは、試験に合格された後にも色々な場面で必ず役に立ちます。

是非理解することを大切にして勉強を進め、試験合格を勝ち取りましょう！心より応援しております。

以上で簿記 2 級計算大会を終了します。

本日はお忙しい中ご参加いただき、ありがとうございました。😊

簿記の教室メイプル Twitter 校